

## ⑭ 子ども福祉体験スクール【七戸町】

訪問日：平成 21 年 8 月 5 日

訪問者：秋庭隆貢委員

兎内佐智子委員

対応者：七戸町社会福祉協議会主査 岡田聡美さん



- 表面的な福祉体験ではなく、福祉の心まで触れられるように工夫したプログラム。
- 地域の施設や人材をいかし、地域のことを考える子どもたちを育てる姿勢。
- 若いスタッフが熱意を持って企画運営し、毎年柔軟に活動を見直す。

### 体験活動事業の概要

【事業名】子ども福祉体験スクール 2009

【事業主体】社会福祉法人七戸町社会福祉協議会

【活動日】平成 21 年 8 月 5 日～8 月 6 日

【活動場所】七戸町総合福祉センター「ゆうずらんど」

【活動内容】福祉体験合宿（1泊2日）

【参加者】町内小学校 4～6 年生 12 名、中学校 1 年生 2 名、計 14 名

【活動費】参加費 1,000 円と社会福祉協議会の事業費で運営

事業は平成 10 年に中学生を対象に始まりました。当初は福祉施設の見学や福祉の仕事の説明が中心でしたが、年々参加者は減少し事業の存続も危ぶまれました。そこで、小学校高学年も対象とし、また職業教育ではなくボランティア精神や福祉の心に触れさせることにねらいを絞った結果、平成 20 年度は 40 名の参加者がありました。平成 21 年度はさらに深く福祉の心を身につけて欲しいと考え、宿泊を伴うプログラムへと発展させています。

中心となるスタッフは社会福祉協議会の若手職員数名ですが、他の福祉施設職員や町の職員、地元の「お話しの会ゆりかご」のメンバーなど、多くの方が協力しています。子どもたちに優しさや思いやりの心を育みたいという熱い思いで、高齢の方と触れ合う機会を多くし、また読み聞かせや肝試しなど福祉にこだわらないプログラムを組んでいます。班ごとに協力して、自分たちで独居老人宅訪問の計画を立て、車椅子でお土産を買い、実際にお年寄りの住む家に行き交流します。「参加者の中から将来的に福祉関係の職に就く人が出れば理想的だが、出なくてもかまわない。子どもたちが少しでも人を思い遣る心を持って、家族や地域の人と接するようになれば、将来地域が良くなっていくことにつながると思う」という岡田さんの言葉にこの事業の全てが表れています。

### 活動の工夫、特長

- ・ 1 日目に体験を通して福祉の知識や心構えを学び、2 日目にその知識や経験を活かして主体的に活動する場面を持つことで、実体験の効果を高めています。
- ・ “前例” や “福祉” にとらわれず、子どもたちに何を体験させ、どうなって欲しいかを考えてプログラムを組んだ結果、宿泊を伴う充実した体験活動になりました。

## 今後の展望、課題

- ・参加者を増やすために、学校でチラシを配布していますが、学校側がどれだけ本気で子どもたちに勧めてくれるかが課題です。
- ・担当者の熱意で非常に良い事業となっていますが、さらに継続、発展させるために、個人の力ではなく法人全体や行政も巻き込んだ活動にしていく必要があります。
- ・単発のイベントで終わらせないために、冬にも除雪ボランティアなどの企画を考えたい。一年を通じて何かできることはないかを考えている、とのこと。

## ☆日程・プログラム☆

1日目（8月5日）		2日目（8月6日）	
9:00	開会式、リエンテーション	6:30	起床
9:30	福祉体験Ⅰ ・お年寄り疑似体験 ・車椅子体験 ・福祉車輛体験	7:00	朝の集い、体操
11:30	昼食 ・高齢者と一緒に ・読み聞かせ	7:30	朝食
13:00	福祉体験Ⅱ ・車椅子で買い物体験	9:00	福祉体験Ⅳ ・一人暮らしの高齢者宅を訪問
15:00	福祉体験Ⅲ ・避難場所マップ作成	11:30	昼食
16:00	1日目の体験まとめ	13:00	レクリエーション
18:00	夕食	14:00	グループワーク ・体験のまとめ
19:00	レクリエーション	15:00	閉会式・解散
21:00	消灯		



## 訪問委員感想

- ◇担当者が若く、熱意をもって自由な発想で取り組んでいた。
- ◇昼食時に地元の「お話の会ゆりかご」の方がボランティアで読み聞かせをしていたのがとても良かった。
- ◇少子高齢化が進む中、子どもたちが高齢者の方と触れあい、高齢者の立場に立って物事を考える機会が得られる企画は、とても貴重である。それを集団で宿泊を伴って実施することで、大きな教育効果をあげている。
 

《秋庭委員》
- ◇スタッフの方の熱い思いが伝わり、子どもたちへの接し方や指導の仕方にもそれが表れていた。若い職員を温かく見守る上司の存在や職場の雰囲気も良かった。
- ◇子どもたちが自分で考えて動き、自分で気づいて欲しいという姿勢が良かった。思い遣りの心を育てたいというねらいが一貫していてそれがスタッフの生き生きした動きにつながっていた。
 

《兎内委員》

## ⑮ あおもり子ども劇場 トンバクラブ【青森市】

訪問日：平成21年10月11日

訪問者：小山内世喜子委員

対応者：代表 宋倉千鶴子さん 青森大学 関智子准教授 ほか

小笠原睦男委員



- 青森大学自然学校とお互いにメリットのある連携。
- 40年近い歴史を持つ、安定した組織と活動。
- 子ども劇場本来の活動（鑑劇）以外の自主活動も充実。

### 体験活動事業の概要

【事業名】トンバクラブ・青森大学自然学校OBOG会共催「稲刈り体験」

【事業主体】あおもり子ども劇場トンバクラブ

※青森子ども劇場の内部に設置された自然体験活動中心の自主活動部会

【活動日】平成21年10月11日

※子ども劇場例会（観劇）は年5回程度、トンバクラブは月1回程度

【活動内容】農業体験、登山、キャンプ、動物との触れあい、イグルー作りなど

【活動場所】稲刈り体験は青森大学自然学校OBOG会の方が所有する水田

【参加者】子ども劇場会員約40名（幼児から高校生までの子どもと家族）

青森大学自然学校「子ども遊学クラブ」約30名（青森市立幸畑小学校4～6年生と保護者）

【活動費】子ども劇場は会費月1,000円、トンバクラブはその都度実費を徴収

農業体験は田植、稲刈、脱穀、餅つきまで1年を通して1家族1,500円

### 青森大学自然学校「OBOG会」

青森大学大学院環境科学研究科は環境教育や自然体験活動の専門家を育成するため、平成15年に青森大学自然学校を設置した。その卒業生や在籍者でOBOG会を組織し、1年を通して実践活動や研究活動を活発に展開している。会員は約30名で、いずれも自然活動の専門家であり実践家である。

### 青森大学自然学校「子ども遊学クラブ」

青森大学自然学校の学生の実践力・指導力向上と、地域の子どもたちへの自然環境教育を目的に、「子ども遊学クラブ」を運営。青森市立幸畑小学校の協力を得て、小学校4年～6年生約40名が参加している。会費は無料。自然学校の学生が主体となって計画し、年6回ほどの自然体験活動を実施している。

あおもり子ども劇場は、「優れた児童文化を鑑賞し、また子どもたちの自主性、社会性を育むために創意ある催しをおこなう」ことを目的に、1972年に設立されました。市内に独立した事務所を持ち、実行委員会を定期的に開催して、安定した組織と活動がなされてきました。最盛期には1,000人を超える会員がいましたが、現在は190人ほどの会員で運営されています。会員は転勤族や教員が多く、子どもに多様な体験をさせたいという教育の意識が高いそうです。また青森市内で新しい知人を得たいと考えている親も多く、芸術鑑賞以外の自主活動も希望する会員が多いそうです。そこで10年ほど前から、会員の交流や文化活動を行うために「高学年部クラブ」「低学年部クラブ」を、自然体験活動

をおこなうために「トンバクラブ」を設置し、多彩な活動に取り組んできました。

トンバクラブは独自に登山などの自然活動に取り組んできましたが、その活動の中で青森市内の自然活動家や環境教育の専門家と知り合うようになりました。そこから青森大学自然学校やOBOG会につながり、お互いにメリットのある良好な連携協力関係を結んで活動の幅が大きく広がりました。

今回訪問した「稲刈り体験」でも、「OBOG会」の方の指導のもと、「あおもり子ども劇場トンバクラブ」会員約40名と、青森大学自然学校「子ども遊学クラブ」会員約30名が活動していました。青森大学自然学校は、職業としての環境教育や自然体験活動の指導者を養成しており、この事業に参画することで実践・研究の場を確保できます。一方のトンバクラブは、専門家の指導の下、質の高い活動を安価に安全に実施できます。また親やスタッフなど大人にとってもプロの知識や技術に触れることで、大きく成長できます。そしてこの二者をつなぐ大きな存在がOBOG会の方々に、社会人入学の形で自然学校で学んだ方が多く、職業ではなく純粋に自然が好きで、環境や教育の意識が高く、研究会や学習会があれば学び、要請があれば可能な限りボランティアで協力しています。個人として無理なく楽しんで活動しているため、一人一人が他団体や他の活動家とつながりがあり、それがまた新たなつながりを生み出しています。自然学校の指導者でもある青森大学の関智子先生を中心に、現在「あおもり自然体験ネットワーク」を立ち上げ、自然活動に取り組む個人や団体を結ぶ動きも出てきています。

#### 活動の工夫、特長

- ・「子ども劇場」の活動のみにこだわらず、子どものために良い企画をしたいという思いで実行委員が各方面に働きかけ、文化体験、農業体験、自然体験など、様々な体験活動に取り組んでいます。
- ・子どもに必要な体験は、本物で良質であること、単発でなく一連の流れやつながりがあることを意識し、プログラムを工夫しています。
- ・青森大学自然学校（OBOG会）側は学生（指導者）の実践と経験の場が確保でき、子ども劇場側は専門家による本格的な自然体験活動の機会を得られるため、お互いにメリットのある良好な連携協力がなされています。
- ・親だけではできないこと、親も経験がないことを、専門家の指導の下で親子が一緒に行うことで、親子共に成長できます。

田の提供者であり、OBOG会の阿部さんが指導



田の両端から、トンバクラブと自然学校遊学クラブがそれぞれ刈り進む



## 今後の展望、課題

- ・ 会員数の減少と、実行委員スタッフの後継者不足が課題です。原因は生活スタイルや価値観の多様化、そして若い世代はサービスを受けることに慣れていて、自分たちで動いて何かを創り出すことが難しくなっているように感じる、とのこと。
- ・ NPO法人化の話があったが、活動の自由さや柔軟さが失われると考え、現在の組織と運営の仕方ではしばらくはいきたい、とのこと。



## 訪問委員感想

◇親子での参加が原則であり、家族ぐるみでの参加者も多い。同じ時間、同じ活動を共有することで、子どもも親も良い経験になっている。

◇子ども劇場のスタッフも、自然学校 OBOG 会の指導者も、ゆったりと構え無理なく楽しんでいた。活動も連携も自然で、長く継続できるコツであると感じた。

◇異年齢の集団の中で、家族と一緒に、田植え、稲刈り、脱穀、餅つきという1年を通した本当の農業体験をすることで、多くのものを得ている。  
◇小山内委員

◇自分の水田を提供し、ボランティアで指導に当たる自然学校 OBOG 会の存在が、極めて貴重であると感心した。

◇子ども劇場の活動と農業体験活動がどう結びつくのかと思っていたが、訪問してみて違和感はなく、良いもの、本物に触れさせたいという子どもたちへの思いが伝わってきた。

◇小笠原委員

## ⑩ HEP21エコクラブ【弘前市】

訪問日：平成21年9月27日

訪問者：小山内世喜子委員、

対応者：代表 佐藤 正さん ほか

小笠原睦男委員、一條敦子委員



- 行政とのパートナーシップ協定を結び、組織・活動内容ともに充実した市民活動。
- 環境をテーマに様々な活動に取り組み、地域で広く認知され高い評価。
- 指導体制が充実し、子どもたちが主体的に高度な環境活動に取り組む。

### 体験活動事業の概要

【事業名】弘前市民参画センター「交流まつり」

【事業主体】HEP21エコクラブ

※ひろさき環境パートナーシップ21（HEP21）の下部組織（子ども組織）

【活動日】平成21年9月27日 ※エコクラブの活動は月1回。他にも自由参加のハイキング等の活動が年に8回。また、HEP21の活動にも参加。

【活動場所】弘前市民参画センター、だんぶり池、ほか

【活動内容】水環境調査、ホテル観察、エコキャンプ、だんぶり池整備、エコクッキング、アニマルトラッキング、壁新聞作り、カレンダー作りなど

【参加者】4歳～高校3年生まで22名。指導者はHEP21の会員8名。

【活動費】年会費1世帯1,000円と市の助成金、協賛金等で運営。

平成13年3月に、弘前市は市民参画のもと「弘前市環境基本計画」を策定しました。その時の素案作成に関わった検討委員会メンバーが中心となって、環境計画を自分たちで推進しようと「HEP21」を平成14年に立ち上げ、現在に至っています。

弘前大学の鶴見教授が代表を務める、HEP21の会員は現在約80名。生活環境、農業環境などの5つのグループに分かれ、会員個々の高い知識と技術と熱意で、多様な環境活動を展開しています。その中でも特に有名なのが「だんぶり池」で、休耕田を利用して会員が整備した湿地には、多くの昆虫が棲むようになり、勉強と見学のために訪れる学校も多く、一般の市民にも広く知られています。

エコクラブは、HEP21地球環境グループの下部組織（子ども組織）で、HEP21の会員8名が、20数名の子どもたちの環境活動をサポートしています。代表の佐藤正さんをはじめ指導する8名は、元教員やボーイスカウト指導者、子ども会指導者などで、子どもたちの指導に非常に慣れてしています。また、建築業者、太陽光発電技術者、理科の教員など、いずれも環境に関わる深い知識と経験を持っています。そのような指導者に恵まれ、子どもたちは適切な見守りと助言を得て、高度な環境活動に取り組んでいます。

活動内容は子どもたちの発案を大切に、月1回の活動は本格的な環境調査からキャンプやエコ料理教室まで多彩です。今回訪問したのは「市民参画センターまつり」で、子どもたちがエコクラブでの活動の成果を、展示・発表していました。他にも「食と産業まつり」などの機会を捉えて、市民に環境保護の大切さを伝えるためのアピールをしています。また、子どもたちが制作した壁新聞やカレンダーは、だんぶり池とともにマスメディアで取り上げられることも多く、地域でよく知られ、高い評価を得ています。

## 活動の工夫、特長

- ・子どもたちの発案や主体性を大切に、大人はそのサポートに徹しています。子どもたちは自主的な計画立案と活動を通して自信が付き、行動力や発表力が伸びています。
- ・エコクラブ会員は幼児から高校生まで年齢層が幅広く、そこに大学生や大人のサポーターが入るため、コミュニケーション能力や社会性が身につきます。
- ・会員一人一人が高い専門性と環境に対する強い思いがあって、地域や市民に環境保護や環境教育の大切さをアピールするために積極的な活動を展開しています。
- ・弘前大学理工学部と連携し、会員が大学で環境について学んだり、大学生が子どもたちと一緒に活動するなど、高い専門性を維持できる仕組みになっています。

## 平成 21 年度の活動計画

2009年度HEP21エコクラブ例年活動計画 2009/5/23

月	日	曜日	時間	集客場所	活動内容
4月	11日	土	9:00~12:00	どんぶり亭	雑談会、どんぶり地作製、春集会
5月	23日	土	9:00~12:00	新館センター	新聞記事作り
6月	7日	日	9:00~12:00	市役所駐車場	第6回身近な環境実習会(春編)(秋分)
7月	18日	土	18:30~20:30	どんぶり亭	市庁に贈した品(飲み物、物中取り、餅干)
8月	1~2日	土~日	1日:9:00~2日:15:00	市役所駐車場	エコキャンプ(長瀬海岸)
9月	27日	日	10:00~15:00	新館センター	新館センター交流集りに参加
10月	18日	日	10:00~12:00	児童トレーニングセンター	食と産業祭りでエコ発表
11月	7日	土	9:00~12:00	どんぶり亭	どんぶり地作製納め形集会(28、30分)
12月	20日	金	9:00~18:00	新館センター	新聞記事作り (発表、秋分)
1月	10日	日	9:00~12:00	清水交流センター	親子エコクッキング (アザヒ、三井市)
2月	13日	土	9:00~12:00	どんぶり亭	冬の雑談会(たけなげがう)、雪下ろし
3月	20日	土	8:00~15:00	市役所駐車場	冬地産祭り会 (発表、お餅)

### ほかに自由に参加できそうな活動

6月	13日	土	9:00~12:00	市役所駐車場	緑色川観察会1
7月	4日	土	9:00~12:00	市役所駐車場	緑色川観察会2
9月	20日	日	9:30~14:00	子どもの森	きのこ探訪 太陽の里一帯ハイキング
10月	11日	日	9:30~14:00	子どもの森	秋山ハイク 久保寺山登山
10月	17日	土	9:00~12:00	ブラザ様	エコクッキング
12月	19日	土	9:00~12:00	ブラザ様	リサイクルキャンプ作り
12月	23日	土	9:00~12:00	ブラザ様	ミニ門松作り
2月	6日	土	9:00~12:00	ブラザ様	エコクッキング

## 月ごとの会報を発行

HEP21エコクラブ 例年報告書 8月号 エコキャンプin臨元海岸inII

発行 HEP21事務局 2009.8.30

＜日時＞ 2009年8月1日(日)9:00~23日(日)18:00  
 ＜場所＞ 臨元海岸(弘前市臨元)フジのワゴン(エコクラブ)・弘前海岸(臨元海岸)  
 ＜参加者＞ 11名  
 ＊エコクラブ員 4名(男3、女1) ＊家族 3名(男2、女1) ＊市民 4名(男2、女2) ＊高校生 1名(男) ＊中学生 1名(男) ＊小学生 1名(男) ＊その他 1名(男)  
 7点 三井 男子、赤松あゆみ、川口 幸

第1日目(8月1日(日))実家一つすてもの〜焼肉  
 及〜4名、市役所が焼肉、2名)エンターテイン  
 ン特刊(弘前海岸)大集合(予定)だったので、今回は  
 キャンプができることを喜びたい。安全第一で楽しい  
 キャンプ!と、気持ちよかった。

9:00 出発  
 弘前市役所(臨元)の近所にちよっとお茶を飲んで  
 〜〜で各自準備〜〜準備室(〜〜)〜〜  
 十三歳入りのお店で釣道具を買った。

11:00 新聞記事でほけい〜〜編み込み  
 夏の雑談会に不参加の  
 発表を待つようにあきら  
 めた無難さが弘前に集  
 るという状況にならず  
 遅れたままです。

13:00 観察開始(お餅作り)

13:30 テント設置(3重り)

弘前さん達の最新鋭いテントを赤松さんから借りながら、  
 みんなの手でワークで2重に完成。  
 準備には男子、妻には女子、右には赤松さんがお餅作り、左には  
 楽しい物にもなるので、このテントで物産めしめすること  
 なく、お餅作りはじめてのテントで、お餅をこねたりして楽しかった  
 !とテント脇の赤松さん夫婦が大喜びでした。

## 今後の展望、課題

- ・会員の人数を増やしたいが、一方で本当に環境問題に関心のある人が集まっていれば  
 いいとも考えており、このまま様子を見たい、とのこと。
- ・エコを通した子どもの体験活動を充実、発展させるために、もっと行政の支援や、助  
 成金などの協力がほしい、とのこと。
- ・HEP21としての活動は充実していますが、市の環境計画の推進という観点では、会  
 員も増えておらず、一般市民への活動の広がりまで至っていないことが課題です。
- ・活動している環境団体やNPO、ボランティアや学校等が情報交換できる場が必要。そ  
 のネットワーク作りとコーディネートの役割を行政に期待している、とのこと。

子どもたちが制作したカレンダー



→ 市民参画センターまつりでの展示 →



### 訪問委員感想

◇サポートする大人が、持っている個性や知識、技術を生かし合い、気負わず自然体で子どもたちに接していた。

◇行政とパートナーシップを結び、また地元の弘前大学で環境についての専門的な知識を学び、会員同士が連携してお互いを高めあっている。地域の社会資源や教育資源を生かしており、恵まれた環境と人材がそろっていると感じた。 《小山内委員》

◇HEP21のメンバーが、極めて専門的な分野の知識・技術を持っており、また環境や子どもたちに対する深い思いと、自分たちの活動に対する誇りを持っていた。

◇非常に良い活動で広がり期待されるだけに、会員の固定化がやや気になった。環境についての専門的な技術や知識を持つ人、高い指導力を持つ人、自分の裁量で自由な時間を作れる人、そういった方以外でもっと多くの市民が参加できるようにならないか、今後考えてみたいと思った。 《小笠原委員》

◇環境を守ることをテーマに、様々な機会を利用して学び、学んだことを生かして活動したり、結果をまとめて公表したり、学んだことを十分に活用していると感じた。子どもも大人も、自分で気づいた問題をどのように解決したらよいかを考えている姿勢が立派。

◇指導者の中には専門的な知識や技術を持つ人が何人もおり、子どもたちはそのような大人からの指導を受けて活動に参加している。子どもを子ども扱いせず、大人の活動に積極的に参加させる様子は、子どもにとって得ることの多い活動であろうと思う。

◇充実した内容の活動であると思うが、子どもの参加者が少なく、子どもも大人も参加者が固定化している様子は、多くのグループが抱える問題であろう。今後の活動展開も楽しみであるので、どちらの参加者も増やす努力を期待したい。

◇学校教育を補完する意味を持つ社会教育活動としても、生涯学習の一環としての社会教育活動としても、大きな意味のある活動である。行政による支援も期待したい。 《一條委員》



## ⑰ 青森原燃テクノロジーセンター 【東北町】

対応者：研修部 石塚直木さん  
科学工房原子人代表 萌出浩さん ほか

訪問日：平成21年8月11日  
訪問者：小山内世喜子委員、  
一條敦子委員、石原慎士委員、  
兔内佐智子委員



- 業務の一つに地域貢献（教育CSR ※P19脚注参照）を掲げる。
- 社会人研修のプロと自然活動のプロによる指導。
- 豊かな設備と資金、ノウハウが充実した活動を支える。

### 体験活動事業の概要

【事業名】サイエンスサマーキャンプ2009

【事業主体】株式会社青森原燃テクノロジーセンター

【活動日】平成21年8月11日～8月12日（1泊2日）

【活動場所】株式会社青森原燃テクノロジーセンター敷地内グラウンドほか

【活動内容】科学実験・工作、肝試し、テント宿泊、野外でお菓子作りなど

【参加者】東北町を中心に小学1年生～6年生29名

【活動費】参加費1,000円と会社の事業費で運営

株式会社青森原燃テクノロジーセンターは、日本原燃株式会社や電力会社等が出資し、平成7年4月にオープンしました。主な業務は原燃関連企業の社員研修ですが、同時に地域貢献も業務の大きな柱に据えており、一般の企業や地域住民向けの公開講座を実施したり、子ども向けの体験活動を実施しています。社長を含めた社員は12名で、そのうち6名が研修を担当しています。それぞれが研鑽を積み、工業技術的な資格講座からコーチングやマネジメント、ビジネスまで多様な講座を担当するプロの指導者です。

子どもを対象とした企画は、参加費300円～1,000円で、石鹸作りやドライアイス遊び、凧制作、お菓子作り、科学教室などを年7回実施しています。毎年プログラムの見直しをし、質の高い多彩な活動を安価に提供しているため、遠く青森市からの参加者もいるほど各企画は盛況です。子どもたちへの指導の中心は、地元で科学実験出前屋を営む萌出浩さん。萌出さんはツリーハウス名人や指笛演奏家など多彩な顔を持ち、著書も出版するなど多方面で活躍する活動家です。プロとして、有償で原燃テクノロジーセンターに協力しています。

企業の持つ豊かな資金と施設や人材が揃っていますが、本業である社員研修業務に支障がないように、また会社の利益となるようになど、仕事としての制約もあります。それでも非常に人気のある充実した企画を実施できているのは、子どもたちに何を与えたいのかという担当者の熱意や考えがしっかりとあるからです。原燃テクノロジーセンターの取組は、地域に多大な貢献をしており、また他の企業のCSRのモデルとなるものです。また、学校教育や社会教育、行政等との関係を深めることで、新たな地域や公共、生涯学習へと発展していく大きな可能性を秘めています。

### 活動の工夫、特長

- ・会社の広報事業であり、社員としての業務の一環ではありますが、地元出身の担当者たちは皆、地元の子どもたちのために良い活動を提供したいという熱い思いで取り組んでいます。
- ・資金や場所、人材などの心配がなく、より満足できる活動を追求することができます。
- ・各企業が持つ資源（人材、ノウハウ、技術、施設）を地域の子どもたちに提供、協力する教育CSRの一つのモデルとなっています。



### 今後の展望、課題

- ・企業としての活動であるため、企業にとってメリットのない企画や本業の社員研修業務に支障が出るような企画はできません。また、今のところ中学生や高校生を対象にした活動や、学校や他団体と連携するような活動も考えていない、とのことでした。
- ・担当者はずっと継続したいと考えていますが、会社の方針によっては突然事業がなくなる可能性もあります。

### 訪問委員感想

◇地域の人や親、ボランティアが関わる活動とは違った効果があると感じた。CSRとして、これだけの研修施設と活発な活動を展開しているのは県内随一と言える。社会にある様々な企業・組織の、それぞれが持つノウハウ、得意な分野、社会資源をうまく結びつけるような社会教育の新しい動きを考えたい。 《小山内委員》

◇子どもの自主性や自律性を尊重しながら、活動や学習を支援する姿勢に好感が持てた。一般的な宿泊体験とは違い、子どものさまざまな能力を開花させる仕組みを盛り込んだ、企画力のすばらしい教育活動であると思う。新しいタイプの社会教育活動であると思う。 《一條委員》

◇企業が社会教育の一翼を担うことに賛否両論はあろうが、社会教育関係事業の予算が減少する中、CSRは貴重な機会である。指導者のスキルも高く、事業後に評価し次年度の計画にフィードバックする手法は社会教育においても重要であると感じた。 《石原委員》

◇設立当初から地域貢献に取り組んでいるため、地域で認知され期待も大きいと感じた。プロの仕事で安心感や信頼感も大きいですが、ややスムーズに流れ過ぎて、慣れや定型的印象も少し受けた。プロの仕事とボランティアなど素人の活動。いずれにせよ熱意や一生懸命さが子どもたちに様々な影響を与えるのだと思う。 《兎内委員》

## ⑱ チャレンジ体験スクラム事業 ほたて養殖体験【県教育委員会】

訪問日：平成21年8月29日

訪問者：秋庭隆貢委員



- NPO等、企業、行政の三者が連携・協力する方策を検討。
- それぞれの分野の専門性や技術を生かし、魅力に富んだ体験活動を提供。
- 子どもの体験活動を実施する団体や事業者の拡大とネットワークづくりを支援。

### 体験活動事業の概要

- 【事業名】チャレンジ体験スクラム事業「むつ湾ほたて養殖体験」
- 【事業主体】あおもり体験活動推進会議（1大学、4企業、7NPO等団体、1社団法人、県教育委員会で構成）
- 【活動日】平成21年8月29日
- 【活動場所】平内町土屋漁港周辺
- 【活動内容】水産資源の学習、漁船に乗って養殖体験、磯の観察、科学実験出前授業
- 【参加者】青森市を中心に県内小学校4～6年生30名
- 【活動費】参加費1,000円と県の事業費、推進会議会員の協賛金等で運営

平成19年度から平成21年度まで実施した青森県教育委員会の事業です。NPO等と企業の持つ専門性や技術、ノウハウを教育委員会がコーディネートして、三者の協働で質の高い体験活動を実施することを目指しました。1日と1泊2日の2種類のプログラムをそれぞれ年1回実施し、また県内の体験活動の創出拡大とネットワークづくりを目的に意見交換会を開催しました。平成21年度は、今回社会教育委員が訪問した「ほたて養殖体験」と、弘前市で「つがる里山食農体験」（1泊2日）を実施しています。

「ほたて養殖体験」では、NPO法人あおもりみなとクラブがむつ湾の海洋資源についての学習会、土屋漁協研究会が漁船を出してのほたて養殖体験、NPO法人あおもりみなとクラブと水辺の楽校まべちが磯の観察会、日本原燃・青森原燃テクノロジーセンター・東芝の三社が科学に関する出前授業をそれぞれ担当しました。また、県教育委員会は連絡調整、計画立案、広報等の事務を担当しました。その他にも、平内町役場が昼食準備や緊急時対応で協力しています。協働するそれぞれの主体が、専門性や技術、施設や設備等を提供することで、充実した体験活動の実現に結びついています。

また、平成19年度にはNPO・企業等の協働による体験活動推進大会を、平成20年度と21年度には子どもの体験活動を創出拡大するための意見交換会を開催しています。その参加者は27名、38名、44名と、年を経るごとに増えており、県内で子どもの体験活動に関わっている個人や団体の輪は着実に広がってきています。

今後は、NPO等と企業の協働によるプログラムを県がコーディネートすることで市町村に広げ、また体験活動に関わる個人や団体のネットワーク構築の方策を検討していく予定です。

## 活動の工夫、特長

- ・ NPO 等が持つ理念やプログラムに企業の持つ専門性や技術を合わせ、質の高い体験活動を創出しました。
- ・ 1年間に2地区、3年間で県内全6地区を会場に体験活動を実施しました。多くの人や団体が協働することで、フィールドは山や川、海、漁港、農村など、プログラムも科学体験、昆虫採集、工作、自然観察、川下り、野外調理、職業体験、社会見学など、多彩な活動を実現できました。

## 今後の展望、課題

- ・ 平成21年度で「チャレンジ体験スクラム事業」は終了したが、引き続き「スクラム体験推進事業」としてNPO・企業・教育委員会が連携した体験活動に取り組み、また連携する活動者や事業者の拡大とネットワークづくりを推進する予定です。
- ・ 各団体、企業とも、様々な活動理念があり、目標は共有できても手法については様々な意見があり、調整が難しい面もありますが、将来的には民間主導の運営を目指しており、行政には各団体間及び団体と地域を結ぶコーディネート機能が求められています。



## 訪問委員感想

- ◇本物の漁船に乗る。海上で見た養殖かご。水揚げしたばかりのほたてをへらで食べる。いずれも本当に得がたい貴重な体験であったろう。専門家による質の高い指導で、非常に内容の濃いプログラムであった。
- ◇青森県は本当に恵まれた自然環境を持っている。今回のような魅力ある自然体験を充実させ、県外の子どもたちまでが参加したくなるようにできれば、可能性が広がる。県内で体験活動に取り組む個人や団体と、資金や技術、専門性を持つ企業や NPO が結びつくことで素晴らしい活動ができる。今後、この事業のような取組を強化し、県内に広めていくことを期待したい。

《秋庭委員》